

「府馬の大クス」 千年の歴史を

見守ってきた巨樹



府馬の大クスは、府馬字山ノ堆に鎮座する宇賀神社の境内にあり、古くから、「府馬の大楠」「山ノ堆の大楠」と呼ばれ、当地域随一の巨木として親しまれてきました。場所は標高約40mの台地上で、眼下には利根川や黒部川によって形成された広大な田園地帯、遠くには筑波の山々を望むことができます。

大クスはタブノキ

大正15年、大クスは国の天然記念物に指定されました。指定された時は、クスノキとして告示されましたが、昭和44年の調査でクスノキではなく、タブノキであることが明らかとなりました。

した。当時は、地元でもイヌクスと呼ばれていたことから、種目を間違えて告示されたと考えられます。今ではこれも、大クスにまつわる逸話の一つとなっています。

タブノキは、クスノキ科に属し、海に近い温暖な地に多く分布する常緑樹で、材はやや硬く、家具や船材などに古くから使われてきました。

このタブノキは、樹高約16m、根周約27.5m、目通り幹周約15mで、樹齢は明らかではありませんが、1000年とも1500年とも言われ、根は隆起して、幹は起伏に富み、神秘的な形状を呈しています。

大クスと子グスの根はひとつ

北側約7m離れたところに「子グス」と呼ばれるタブノキがありますが、もともとは、大クスとつながっていました。これは、大クスの枝の一つが地上に垂れて根を張り、成長したものです。かつては枝伝いに渡って行けたそうですが、明治末年ごろに枝は枯れてしまいました。

枝がつながっていたころの様子は、江戸時代後期に刊行された『下総名勝図絵』でうかがえます。絵には、大クスの根元にいくつかの祠が置かれている様子が描かれており、今でも根元には正徳元年（1711）

銘の石祠が深くくいこんでいます。北西側に隣接する公園の一部は、平成16年に発掘調査が行われ、弥生時代から奈良時代の堅穴住居跡や、中世の府馬城に関わると思われる建物の柱穴が見つかり、約1800年前から人々が生活を営んでいたことが明らかになりました。大クスは、この地にしつかりと根を張り、時代の移り変わりを見過てきた生き証人と言えるでしょう。

しかし、ここ数十年の間に、枝枯れや幹の腐朽が目立つようになり、その都度、支柱の設置や腐朽部の補修などが行われてきました。平成15年度から本格的な樹勢回復工事が実施され、現在は、地元の人たちによって大切に守られています。



うになり、その都度、支柱の設置や腐朽部の補修などが行われてきました。平成15年度から本格的な樹勢回復工事が実施され、現在は、地元の人たちによって大切に守られています。